

神代字原考

神字古事記
首卷

内閣文庫			和書
二七函架	八五二八册	九三	類
内閣文庫			和書
二七函架	八五二八册	九三	類

太政官文庫			和書
一六册架	九三	八五二八	類
太政官文庫			和書
一六册架	九三	八五二八	類

内閣文庫	
番號	和 8528
冊數	4 (1)
函號	137 27



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



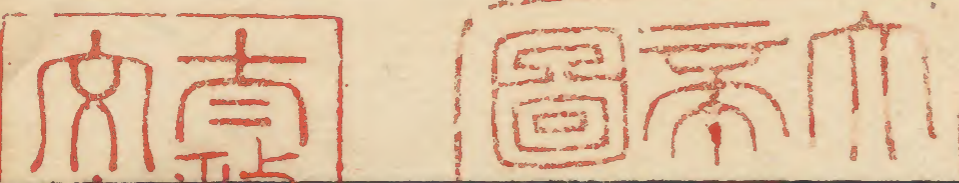
© Kodak, 2007 TM: Kodak



洪

此皇天御國者言靈氣之於天也
 為而天之靈物皆言神耳
 命運變通教亦言語道遠
 者皇天御國遠者遠也
 謀謀有外國乃如來字
 等為古登無久神字乃
 佛身上帝言神文字

印



此皇大御國者言靈能幸祐久累國爾
 為而方之事物皆言辭耳氏言傳語繼
 介連婆道教亦言語道爾備絆麗憐然
 者皇大御國迹者遺忘迺為爾判神字
 謀雖有外國乃如文字乎以道教乎將
 知等為古登無久神字乃瑳陀踈伽珥
 低殊耳上言与喇韓文字乎用馴互阿

○神代字原考序

○一

禮婆先達亦上古爾文字無由乎云而
遂你國字者無事斗人、思閑理然尔
近頃外國人能渡來志事始而与喇萬
國者國字迺有事詳尔言舉斯而皇國
爾者國字乃無乎弘古圖伎噶呷呷並
而外國刀同如迹言流累母耻伽志久
外國者文字乎以道教乎學那麗婆文

字專要乃物皇國者言語乎以道乎知
禮婆文字你不拘差別乎能心得而有
者亦說解者母不有故寂味氣無口惜
於毛母知須屢素藤原政興神字乃有
之事炳焉乎言舉斯而神字古事記乎
記而世身大皇國能光乎輝左伐也登
思奮起而有者甚嚴玆囉伽備且美斯

吉心構也磨尔端書為而与登乞任是
亦國忠乃一端叙斗思幣婆其功績素
一筆如此南

明治四年布美月

神隨舍志苗壽

鐫木櫟堂書

神代字原考

藤原政興謹撰述

懸卷もかしこき此乃皇大御國ハしも萬邦の本於國小して
天皇命を大地の大君主小坐まして天雲乃むらぶはり
谷蟻れはまはきいよ四海八極を悉皆統御て大御食つ國
空知食にあも有なる如此て天下小をまつろはぬものなく
海山ととりてはるふる神隨此國所出生天之益人ハいふ
も更ふり蕃等も疾く歸化て雄武至尊此大御稜威をうしこ
と大御心成心として慎と敬ひ尊とてはけり奉る理あり
然とど古代と運動すれを禍事起り害ふを異た邪道のさだ

○神代字原考

○一

りなは満廣ミチヒロごりて世を亂したるオホサミ大皇に背き奉る醜シコ
めき惡穢キタオキ奴もあれどとちまちよろち罰キタ免賜ひ日神乃磐窟イハヤ
處を出給ひし如く皇孫の神武大和魂奮發し給ひ大御光成
うシヤやかし坐て此細牙知足國中に大宮柱フト太く築固安國と
鎮座百官百寮ハ如星列八十國サツカチホサズ鳥の人等も棹柁不干ふ祿満ミチ
つゞけて寄集ひ朝廷へ獻貢て階下ミモト臣服日に夜ゲ奉仕ツカヘマツル是
皇ミコ産靈ウツ神の幽契フキあるとよて中ナカくオモトおを固より然るシ履き道ミチ
りアツ顯人アツよは容シ易シ知チえぬ事どもコトありナおを固より然る履き道
理リありきては四海ハ波風もシなく静シなく安穩オダビふ故ユ又皇御
國の御國体ハ大地元首腦モト髓ヅメふる万國乃綱紀ツツふれトハ無窮シ
の寶祚アツシキあり

或人云地ハ固モトまり空中の一物モノふして他トれ星と異トら
ば共ト又日輪を心として旋轉マハル是を公運一周と云て一年
也又私運一週あり是を一日ヒを故ユ又日夜運轉止息ヤムトキふ
く環タマシの端ハシふきシ如ナし何ナニぞ上下ウヘノヘあらむ體象カチモノ亦モあらむや
又輿地圖ウチノチふど捻弄ヒネリて云憐アハレあるナ日本ハニよトふ小也
故ユ又日本を國とはいハふニはシ鴛ウといハふニふニひテ已マと
恐縮オソクて却て我國を賤シし老國の狭小セマキを恥ハ惕シるコトあバ
加カも田鼠タリスの猫聲ネコノネを聞キて屈敬拜伏マツルするコト如シ是ハ實マコト也
思オモひスろりの管窺セマキありカくて新論シンロンも地之在天中チノチノナカ渾
然無端ゼンムツ宜ヨシ如無方隅也ニ然凡物莫不有自然之形體ゼンゼンノカタチ而存焉ニ

而神州居其首。故輻負不甚廣大。云云西洋諸蠻者。當其股脛。故舟船走舸莫遠而不至也。而至海中之地。西夷名曰亞墨利加洲者。則其背後。故其民愚戇。而不能有所爲。是皆自然之形體也。と有るを信は然るとあり又國の廣狹大小物の多寡を以て何ぞ國の尊卑美惡を論はむやこも本居翁乃數丈の大石も方寸の玉も志らば月と牛馬ハ大ふれども人よ志らば國もいふほど廣大ふりとして惡國ハ惡く狭小ありとして美國を美ふり云云大小字以て國ハ美惡をいへむや云云と言はざる如し

天照大御神の本初御國の大御光字輝さむとするに既に神

典ミフミよ著明アキラカなり其是天地の初發ハジマリの時より高天原タカマハラに御坐ミマシまし
て天地を鑄造アヒツクリまし化育カイク之祖天神諸命カミモリミコト以て伊邪那岐伊邪那イサナイサナ
美二柱ミフタハシラ大神カミは此たゞよへるくふを修理ツクリ固成カタナヒと勅給イラサき故妹
妹二柱イモフタハシラ神先初カミマシて自凝オノゴロシマ寫シマを得給エひ此を國中の御柱ミハシラ天御柱アメノミハシラと
見立給ミタテひて蛭子ヒルコ粟アハシマ鷲シマを生ナり然シカるを御言舉ミコトコトの前後顛倒アトサキサカシマよ
よりて不祥フサハズ猶ナ天神カミ之御所ミコトに參上マキガリてやうて太占フトマニの卜相ウラアヒのま
ふコ此大倭オホヤマト豊秋津嶋トヨアキツシマを生給ナひまハ八百万ヨロツモノ神群品カミグンヒをも生
ふし給ナひき

倭國多枝葉ヤマトタチエれとぞひかり其是水蛭ミヅヒル淡鷲アハシマ尸シ潮沫シホナリの疑ウタガハシ
て成る國よしあれば誠マコトは不良フレイで子之例ミコノカズよ不入イラズあり

さる或人の説は万国皆むろし舟路の不通時ハかの
あり、自の國れゑ太古天地開闢の總て傳有し如く言
ふを皆万国悉く同じしといふ皇國も亦彼説のとく此
國をり太古の真傳有しと思ふ万国の學を知らば
井蛙の如しと嘲り笑ふ輩もあれど是ハ却て蠡海の甚
老たふを其ハ此國の事を深く學て味ふを深し其人は已う御國乃と
ふどハ夢よも知らぬもの多く信は性の惡なり彼夷人
さら皇國よ来てハ我方の事を學びて稻荷様又ハ幡様
れ御生誕ハ如何して御功德ハ何とぞふどいひ又義經
公ハいふふ功ありて如何ふる人ぞやふどく如此と

を甚聞アく欲し又万国の事を手廣く學ぶる先自國
乃とを委しく習ひ得て其上よて他國の學をそれども
我邦の人々先初發ら外國教を學び已こそ博學者
と鼻うごめかし姦しく言て自國の事は少しも知ら
ずですし様は思ひ却て皇國學ハ假字書れよて迂遠
てあらぬかり學ねふ人ハ愚弱ふるといへどいとう
をいら痛く笑しれとふり
さあはては天照日大御神月夜見神雄雄神生アレ給ひ天照
大御神は天事を授給ひ日神又皇美麻命は天位を授をゆふ
其時高光日大御神の大御手は天於日嗣の寶璽ハ咫鏡を捧

○神代字原考

○四

持して吾皇孫命の萬千秋の長秋と天地と共無窮と所治看
國ふりと勅給ひて葦原の瑞穂國を授給ふこれより皇國を
天紗不易と天位を今に傳て變らせ給はばも其大御故事
此起原を神魯岐神魯美産靈二柱大神の元より所預知看志
し故事を皇美麻命の天降坐時に大御口つららと御言依し
賜ひしを彌遠長と聞繼ぎ語繼ぎ傳来つるよふも有ける
天照大御神の御皇紗連綿百皇一世れ如く天地日月と
共彌常磐と照し明と所知看故万古と動無き御國体と
して御一系不變ハ世界万國と無比例ことふり然れば
此一事を以ても万事多言よハ及ばざるふり

然る故と万づれ物事も皆万國と秀で勝れて美と此ハ更な
るると古語と言靈の幸はふ國言靈の祐くは國と稱へ来て
宇都志世人の音韻言語の道遙と万國と優て正と清朗
足ひ調へると無比類字内の一奇事れりさる故とこそ外國
のとく言痛く何事ふも理ふとを説論し理を以て事物を粧
飾はるとふく事理とふ言語のうへと有ふと又人の智もて
事物を定むるもこれに非れば皇國を大寛とて言痛ハ言舉
せば故古語と葦原の水穂の國を神ふら言舉せぬ國とい
へり皇國ハ固言辞のうへり靈備はりあま言舉せばてふ
其事その物とつきて其とより知らるふり

百皇一世の御
國体と此言辭

の妙ハ万邦
無比例とあり

言靈コトダマの事ハ豊蔵トヨクラ館インの傳トとよくよくして顯幽ケンウ兩途リウト明メイ

亮ラカ分ハ說セ給ギへバ實マコトハ本教ホンキョウの神理カミコト幽契ウキをもうかゞふり

足りふむ其ハ彼家カノイヘ說セを聽キ聞クて知るべし

さあ言靈コトダマの幸サキをへ祐ササくる國クニあるうらふ万事マンジ言辭コトバハあれば

外國ウゴクの如ごとく文字モンジハ預ヨりらばさき後ノチ文字モンジのちともれく古来コライ

より上古コノコトの世ヨ文字モンジ未有ムクの說セふども見ミへとれども上古コノコト皇ミコ

國クニの文字モンジ有アしと炳アキ焉ナリふり其ソノハ圖書トクショ察サツありし梵字バンジ跡アトの書カキ

肥人ヒト書カキ薩人サクジン書カキふどの有アし以モて少オホも疑ウタガふられバ今更イマニ論ロン

ふまぎよはあらば然カまど齋部イミベノ廣成ヒロナリ宿禰スクネの古語コゴ拾遺シツイ序ジ又マタ上ウヘ

古コ之ノ世ヨ未有ムク文字モンジ云云クニクニ尸シと三善ミヨシノ清行キヨユクの勘文カンモンに上古コノコト之ノ事コト出口デグチ

傳トと云イひ大江オホエ匡房キウボウの菅崎スガサキ宮記ミヤキ一條イツジョウ禪閣ゼンカク兼良ケンリョウ公キミの日本ニッポン紀纂キザン

疏ス北畠キタハタ親房チチボウ卿キョウ乃ナリ神皇カミミコ正マサ紗紀サキ等トドも我ワレ上古コノコト文字モンジ無ナシふ趣オモヒも

言コトきたる此等コノトドの諸說シヨセツを證アカシ據ケとして貝原カイハラ篤信トクシンが自娛集ジユクシツ及オ太タイ

宰サヘ純ジュンが和讀ワドク要領ヨウリョウふども我邦ワカクニ上古コノコト無ナシ文字モンジ事コトハ先賢センケンの說明セイメイ白シロ

也ナリと如此カク世ヨの事コト識人シキジンの言コト定サめし故ナリ何も事コト知らぬ下賤ゲセン愚昧ウマク

のむのふどハさるあとも思オモひい尸シと一字イツジツ半ハ点テンも不見ミヤ常トシも

世ヨふ用ヨウひヒぎギれば全マタく無ナシ事コトに思オモひとゆ見ミともわららぬ

故ナリ蚯蚓ミズズメの如ごとく見ミる外ソノトふといひて嘲アザカシり笑ウツふのこれり今上イマカミ

件ケンも擧アゲる博識ハクシキの人ヒト等トドハ深コソクく思オモハば漢字カンジれと文字モンジと思オモふ也ナリ

○神代字原考

○六

無誓の甚しきふり其ハ先ト部善方宿禰の釋日本記の開題
に云問考讀此書將以何書備其調度哉此書とは今の日本書紀を言ふなり下二色
又倭答師說先代舊事本紀上宮記古事記大倭本紀假名日
本紀等是也といへるに又問假名日本紀何人所作哉又此書
先後如何答師說元慶說云爲讀此書私所注出也作者未詳又
問假名本元來可在爲嫌其假名養老年中更撰此書然則爲讀
此書也不可謂私記是等ハ平田大人の古史微開題記の神世文字ハ論といふ條に委しつきて見るべ
答所疑有理但未見其作者云云今案假名本世有二部其一
部者和漢之字相雜用之其一部者專用假名倭言之類上宮記
之假名已在舊事本紀之前古事記之假名亦在此書之前可謂

假名之本在此書之前或書云養老四年令安磨等撰錄日本紀
之時古語假名之書雖有數十家皆以勅語爲先然則假名之本
尤在此前耳又問假名起當在何世哉

然レバ假名日本紀は今何王つる日本書紀より先なる
こと炳焉しきて其書の体裁ハ如何又有々むと考るに
其本二部ありて一部是和字と漢字を雜へ用ひ一部ハ
假名の倭言の類を用ひありと云此假名ハ疑ふく神字
の事と聞ゆ書紀の前又は片假名五十字又空海の以る
は字等ハ無々レバあり和字の神字あると下又云へる
と考合すべし此前項アてハ用ひ來しと見也和字を神

字といふさるハ今のハ呂波字と混ふれハあり既に
此以前逆常ヨ用ひし故神字といふは唯和字といへ
ふなる處シ

答神功皇后以前文書不傳已無所見至于應神天皇御宇遣使
新羅招来文人僅習文字然則自彼御時可在之

抑漢字の皇國ヨ渡来る最初ハ然有る如く輕鷲明宮リ
天下知し者以應神天皇の御世十五年八月百濟國より
阿直岐を召し又王仁といふ二人の博士を召して宇治
稚郎子命僅ヨ習給ひ論語千字文等をも貢獻せる由
御書ヨ見へて然る事れり

答師說大藏省御書中有肥人之字六七枚許先帝於御書所令
寫給其字皆用假名或其字未明或乃川等字明見之若以彼可
爲始歟

然い牙め肥人書ハ神世の假名の事ヨて真草諸体有し
あるべしそは既に六七枚も有るハ僅ヨ五十字許の字
數をいふに大字ヨ書ても二三体有しと論ひ
其項を既ヨうふ字の世ヨ少ふしと見えて中ヨは
讀うねとるも有りしと聞ゆ故ヨ或ハ其字未明杯有る
かくて乃川等字明見之と云へるハ其中に毎戸ノ常
ヨ用ふ假字ヨも符合バ明ヨ知とるヨしありそは乃ハ
乃乃川ヨを乃川ヨとやうヨ書て有しと見ゆ此ハ肥國

人の書し神字は草書として中つ世と書傳とるあり
先師、説云漢字傳來我朝者應神天皇御宇也於和字者其起可
在神代歟龜ト之術者起自神代所謂此紀一書之説陰陽二神
生蛭兒天神以太占而ト之乃ト定時日而降之無文字者豈可
成ト哉作者事濫觴可在神代者幽玄而難測伊呂波者弘法大
師作之由申傳歟此者自昔傳來之和字於伊呂波被作成之
起也

あくに漢字を用ふるを應神天皇の御世より空い牙
る多然るとあり其は日本紀尸と古事記等とに見ゆれ
第更論ふしはて於和字者其起可在神代歟といふこ

の和字も神代文字を言へる事よて伊呂波假字等よは
無ふとい可^レ在神代歟と有^レふていと明白ありあくて龜
ト之術者起自神代云云と有るは傳の誤^レを其儘
並舉たるあらむ龜トハ韓國のト法よて神代亦曾て
ふき事あり鹿ト此業ハ尸とに有しを中古の項をり龜
甲よ代て用ひ来しあり其は鹿の肩骨を灼^レたり龜甲の
方便りとき故あり扱^レふと此紀の述義ふ云
太占
私記曰問是何占哉答是ト之謂也上古之時未用龜甲ト以鹿
肩骨而用也謂之フト丁尔又問山海草木皆是二神之所生也

而未^レ見^レ産^レ禽^レ獸^レ之^レ文^レ然^レ則^レ此^レ鹿^レ何^レ時^レ生^レ哉^レ答^レ今^レ如^レ此文^レ不^レ詳^レ禽^レ獸^レ
初^レ育^レ之^レ時^レ云^レ云

と答へし如く神代は龜トの無ふ事知べし故伊吹舎大
人の古史徴文字論の説に釋紀の首卷は問答の説乃多
きは其中は一ツの問は異なる答説のニツ三ツある事
を一人は答へとして心得ざる事あるに就て案^{オモフ}
此を釋紀の撰者兼方の答はあらで古人の説くを舉
て其事ハ左いへる説も有る右云へは説を有る^{カク}と其説
の有れとく並舉たる物とおぢゆ其は兼方一人の答説
あらむは如此を有る^{カク}じき謂ふを^レ取^レり^レは言は^レば

本文の釋ふはいちも私記を始めまは古^レ人^レは説を舉^レて
自^{カク}の案^{カク}をも別^{コト}は兼方按と云へるをと思ひ合はべしか
らむを彼首卷は舉^レる説等ハ古人の説を並舉たるふ
ふと疑^{ウツ}ふ云云といはれし如く龜トふとま^レ折^レく異
なる答も有ると其ハ心して見はべむなり^{サテ}又此^{日本}紀^{日本}
の^レ一^レ書^レ之^レ説^レ陰^ニ陽^ニ二^レ神^レ生^レ蛭^レ兒^レ天^レ神^レ以^レ太^レ占^レ而^レト^レ之^レ云^レ云
無^ニ文字^ニ者^レ豈^ニ可^レ成^レト^レ哉^レと云へは彼二柱の大神蛭子を
生^レ尸^レして天神の太^フ兆^ニと相^レ給^レふ時^レは文字無くも御ト
の成^レる^レと^レ由^レをいへる^レは^レ信^{マコト}に^レ當^レる^レ説^レあり^レ此^レを^レ登^レ
も^レく^レ太^レ占^レの^レ最^レ初^レよ^レて^レ如^レ此^レて^レあ^レれ^レ時^レの^レ御^トに^レ文字^レふ^レ
く^レて^レハ^レ成^レる^レと^レき^レとい^レふ^レ字^レ信^レよ

當きるといふをいぶしく思ふ人もあれどあしよは
中くは煩うはしくて言がよきと今志ばらく洩らし
は其ハ予が別言へる時あり然れと下よ
少しく言へる處あはばよく心留て見べしいと
六く尊き御術ハこぞ然を鹿トばり太古と思ふハ非
事ふりてべて測難神の御心なうふ術よて何
よまれ御トの顯ハし安き器こそとれまよ作者事濫
觴可在神代者幽玄而難測亦も真り能當きる説ふり作
者ハ測らぬしと云るを害なきを思兼神の御作ぞと
思ひ混ふふぞ其は固有の自然の圖を初めてハ意の神
此石窟戸よて鹿占の大兆を擬ふ事業よよりて驗體よ
畫著し給ふよて御作といふよはあらばあし且伊呂波

者弘法大師作之由申傳歟此者自昔傳來之和字於伊呂
波亦被作成之起也と言へふは諸書不見えて童兒さ
へあ戸秘く知る如く弘法大師の作せる事更論ふし
さて彼古史徵漢字ハ草書を撫ひて神字の書風ハ製
り直しなむ昔より傳來せる和字を以呂波ハ作成せ
りトハ言傳るけむと其注に和字とは神字のト云云
漢字の草書を神字の風ふふらひて作成せるふると纂
疏ハ漢字を假て和字と形似と有思ひ合せて悟べし
云云といえれし如く然あにこそ

はく又予が祖父政守ハ考著せる古語止草と題號せる物よ

古語止草ハ總て三卷あるが其うち我皇國を上古に
文字ふしといへる説なほよく憤して我上代は文字有
しといふこと釋紀をまじり文字論等の諸書を精しく
論ひ定め説をし物ありされどあつは所狭くて煩ハ
したも急予が別といへる時あれば今大概は洩し初
種々論ひ忌部正通の神代口訣を擧て神代字象形也といへ
る象形ハ綴バ日を○月を●星を○山川を川川のやう又い
ハ井ろハ□はハの如くあつろ印は畫るふらむろ又氣賦
舎れ翁の説は上に引ける口訣の文と釋紀は和字の興を問
は答の其一に師説大藏省御書中有肥人之字六七枚許云云

と見えたる二説を合せて考るに其事物の象形を畫ると
口は出る音くの印は作る假字との二種はあむ有る其は
口訣は象形と云るは漢字は六義と云ることの有る六義を
へり其一は説文序は象形者畫成其物隨體詰詰日月是也
と有て日月魚鳥馬車などの字は古跡を直に其物の形を象
てて畫るを云ふ然るに我が神世は此一体はさし去と著
明ふり云云さて象形の字ハ人も思ひ初きて畫き出べき物
ふる故に我人も畫ききど
此今世はも都て字を知らざる人の記え居らで叶ざる
ことハ一の印はふはと記き二の印はふはと記き外る

印は□。を畫き玉の印は○。を畫く多きひの多るふ
を見て和漢の上古をも推察るべし此□。○。やがて象形
の字ふるをや云云政興云此□。○。六をぞ信よ字原の起
ふて其ハ下は論ふを待て見べし其ハ下は論ふを待て見べし
限ふき事物の象形を盡く畫むとハ煩しく勞るはしきおと
ふる故は口より出る音の印を形より於して假字を製て給
牙り乘む
字を音に數おど印せるむあり便ときはふし然るを漢
國よも字多くて却て便惡く煩はしき由ハ縣居大人鈴
屋大人の既は委く辨られざるが如し戸は西洋人も甚

を漢文字を笑ひて漢人ハ餘りに字を多く製て生涯
己が國字を知盡はて能はばと云へるをも思ふはし政
興按ふは象形ハ上古に和も漢も皆各々其れづの心
あるし小畫しあらむ字の如く數のきより有はらば
固よりうぎに無き象をそれづの心おぼえは縦バ○
を日又玉□。或ろ又外のやうに人々の心くは印せし
らむ易畧例は夫象者出意者也。又言生於象象生於意と
有又考ふる小我上古の下民おどハあまりは神字ハ用
ひばりしと見も象形こそ用ひしは外圍の如く文字
の尊ひ教の料とをれど皇國ハ言靈の神は幸と大ら

うにいひたへ語を傳へ來しふれは假字ハ多く用ひ
ぞとも事ハ足りあむ其ハ政守れ古語止草に上代ハ天
子又何らざれば書を製せばようやく上方のそ神字を
扱ひ給ひし故田舎の農夫ふどハあまり又取扱事乃あ
らざれば漢字傳來の後ハ上代の字ハるはら成て
有無をも知らざりしからむ

此を假名と云る義を音の印を仮書て象形の字ハ真ニ其
物の形を畫する字ニ對する稱あるべし云云はて字を形と
いふ義を名ありそれ名とは業の省言ニて事物ニ負する符
印をいふ言と聞ゆるを名と云ハ事にアを物ニアれ此を

某の事其ハ此の事と知れず料又作せる故からむ

まよ按ニ成の畧語ニて事を記し成に由る皇國に本よ
り字乃無らむふを唯又漢語のそに字と云て那とい
ふ訓の有べくと非ズ

如此在バ真字といふも象形の字をいふ固己の古言ありな
むを漢字或專に用ふる世とありて彼ハ字ごとく義ありて
音の符と製れふ神世の假字と異なるもの故又彼をいふ稱
とはありよけむ

神世の假字ハ筆此運びのふぶららありしと聞ゆるを
同じ神世乃字とハ云牙ども象形の字は自りら又畫か

偽經又神道傳秘翁等此偽作ふして附會の説の多しされ
 と古社の神庫ふどは傳せる實の字も多うるべしつ
 いと近ふ項も神代の文字として種々取集へ左ふ右くに論
 ひ辨へせふも弘く傳へむと功志を成せる人も多うれバ愛
 をく雄しき志よは思ふと其字原の起ハ全を備ハらばい
 かふる神理ぞと委しく解々る説のふければあハ如何ふと
 いぶかり惑へる人も多し然哉平田大人の考著されし神字
 日文傳小

○ 日文四十七音

イ	エ	ヲ	キ	コ	ヒ
ニ	タ	ル	ト	フ	
サ	ハ	ユ	モ	ミ	ミ
リ	ク	キ	チ	ヨ	ヨ
ヘ	メ	ツ	ロ	イ	イ
テ	カ	ワ	ラ	ム	ム
ノ	ウ	ヌ	ネ	ナ	ナ
マ	オ	ソ	シ	ヤ	ヤ

○ 神代字原考

○ 十六

^スㅅ
^アㅏ
^セㅑ
^エㅓ
^ホㅕ
^レㅗ
^ケㅛ

^タㅌ
^テㅎ
 五畫

縦の義コトふてタテ一十一此五畫ハ上ふる四十七音の字モジ
 此母と為シて縦韻タテヒキ又用ツカする字原ナノモトふる由ヨシを著せるれ也

^ウㅜ
^オㅝ
^イㅟ
^エㅞ
^アㅠ

^ヨㅟ
^コㅠ
 九畫

横の義ヨコふてハ合コト「」「」「」「」此九畫ハ上ふる四十七音の字チ此父コトと為シて横音ヨコヒキ又用ツカする字原ふる由を著せるあり

^スㅍ
^フㅑ
^ツㅓ
^ルㅕ
^ヌㅗ
^クㅛ

右神代四十七音字者天兒屋根命之真傳也對馬國卜部阿比留氏内々傳之可秘々焉○一本云右日文四十七言者日神勅天思兼命所作云云○一本云右神世行之

中古所謂肥人書也云云右の日文四十七字を行文と有れど真字と見ゆ此を傳へしる阿比留氏を對馬國下部と有れむ天兒屋根命の裔あると疑ふし對馬國のト部ハ天兒屋根命十一世孫雷大臣命イカツオホオミ、ヨリ出たり云々より出たり云々

如此て此ハ太兆法の驗躰をト此の如く書は誤りて極て

十如此ふらむと所思るふもオボユ麻知形と云マチガタ

斯有る形を言ひ辻ふど云を思ふも十イナヅルあると炳焉イトハフカ云云其本原を必モトススあるはく思ひ定色とり此を最イトハフカ幽き謂あるとあるを云云きて此字原を太兆より出ると疑イハレふく所思る由ハ縦の五畫は驗形の十オボユを裂て作れるふく

ト十は十を左右二部り別ち一を中の一を去り上は十の一を下につけて下を十此一を上につける物あるは横の九畫はとり出さるふて先〇を□を圓を象どり工を十の中此一を中漸して上下に付け「ハ」を斜に裂さる本此形をその儘は二畫は別ち用ひとりと見え「ハ」を縦に真中を裂て二畫は為さるあり合「ハ」を斜に裂さる上の一畫を〇は象とれるは冠をへ「ハ」を斜に裂さる下の一畫を其儘小引起しとる物と見えたり但此を唯りち見とる有れまふ言ふる

但中よは當らざるも有はれ上件四十七音の字を六の五が後人よく考へて定むべし

畫九畫を縦母横父を用ひて作れる故は日文とは言ふある

イ ^ユ	ク	ヌ	ル	ツ	フ
II ^ユ	LT ^ク	TT ^ヌ	JT ^ル	CT ^ツ	HT ^フ
II ^ヨ	LT ^コ	TL ^ノ	JT ^ロ	CT ^ト	HT ^ホ
II ^イ	LI ^キ	TI ^ニ	JI ^リ	CI ^チ	HI ^ヒ
II ^エ	LI ^ケ	TI ^ネ	JI ^レ	CI ^テ	HI ^ヘ
II ^ヤ	LI ^カ	TI ^ナ	JI ^ラ	CI ^タ	HI ^ハ

ヘ ^ス	
AT ^ス	T ^ウ
AL ^ソ	L ^オ
SI ^シ	I ^イ
SE ^セ	E ^エ
SA ^サ	A ^ア

べし然るを日文とは火文の義ヒフミふて庶の肩骨カタホネを波ハ、迦カの木キ
 此火もて灼ヤキてその火ヒ圻サキの食ハムべき文カタを音コエの符印シムシと為シると
 り出イデとる言と見ゆ云云サテ一本の奥書オクガキ小此を肥人書也と言
 牙ヨシるも由ヨシたることれ云云ツイデ六の遺文イッラと表シせる
 父母チハハの字原ツイデの次第ツイデよりて五十韻イッラの圖カタを作シて試シるニ左リの
 如く成ナせと云云ナ

さらでハえあるまじきとふれば摘出せるあり上は古史徴
 を引たる所も同じとにもに文意をつめて擧とれば各々本
 書よ待きて如此精しく論ひ辨へらまじしを實に然るものと
 見ゆべし。ふて此書の貴妃事ハ今更論ふよあらねど能くも深く考
 著されしハいと甚もろしく奇妙あり其ハ外はかく正
 志く明らなく説書のふけれど若くを著し諭給ざむ
 空しく神匱よろもれて世ハ出ざるを偏と言靈の幸と此
 大人の功によりてかく再び世よもかゞやき出しふは
 神字志ある人ハ六を頂^{イナキ}捧持て拜讀ふらむや然
 ほど又ありいと近き項豊麓館の學費ふく神字原を考訂
 されしを見るよ嗚呼奇靈ふるらも妙なるかと是を鬼神も

夜哭々むろと思ふ不ど實は幽々神理の在る字原尔して世
 界萬國の大元の字よして此を誰しも諾ふハばふものあら
 む又惑へるとのもろらむや實は諾ひらしこむべし外國
 のゆらしら人も感信をべふぞと思ふ其圖をされどし



是を靈形といふあのかさちといふ言む也如此て
 方圓を十字ふて締結る然も中の十字下上十

上五箇は各割きて五母韻五母聲と成是萬聲の本ありま
 幽 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
 五箇は五母の音聲成は政興按はハの字
 を幽音五箇のうちにいきてあれどハ多字原の割出しは口
 をり出で〇よと出されどこはいらむ神隨の理不違
 ぶずも非る小就て塾考ふる合ぬ事あり又伊吹迺舎
 其はヒ〇〇〇のむく合〇〇〇考ふる合ぬ事あり又伊吹迺舎

音 顯

音 の 廿 五 聲

ナ	マ	ヤ	サ	ハ	ワ
ナア	マア	ヤア	サア	ハア	ワア
ナエ	マエ	ヤエ	サエ	ハエ	ワエ
ナイ	マイ	ヤイ	サイ	ハイ	ワイ
ナオ	マオ	ヤオ	サオ	ハオ	ワオ
ナウ	マウ	ヤウ	サウ	ハウ	ワウ

○神代字原考

○二十二

幽

ア	エ	イ	オ	ウ
アア	アエ	アイ	アオ	アウ
エア	エエ	エイ	エオ	エウ
イア	イエ	イイ	イオ	イウ
オア	オエ	オイ	オオ	オウ
ウア	ウエ	ウイ	ウオ	ウウ

再訂の旧文傳五十音訂正圖ふどは大概最上カのシ舉ケたる如く
 よて唯合字を \vee うくハ改められど \vee 小 \circ のふくたる如く
 音五箇の中よをいらざるふり然 \vee 今更 \vee 訂正を加え前圖
 と校合乃と免下 \vee 圖を作 \vee ま \vee 字原の割出し \vee 茂も著よふ
 し \vee あ \vee ち \vee これと五母混合して幽音の二十五聲を生 \vee
 \square \square \square \square \square 五箇よ分 \vee られて五父の音聲と成五母と混合し
 て顯音の二十五聲を生 \vee 然 \vee して父母縦横の字原次第よ
 くりて五十韻の圖を作 \vee ハ左の如く成 \vee ふり

カ	カ	カ
カ	カ	カ
カ	カ	カ
カ	カ	カ
カ	カ	カ
カ	カ	カ
カ	カ	カ
カ	カ	カ
カ	カ	カ
カ	カ	カ

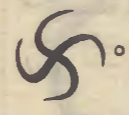
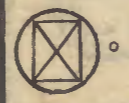
おれぞ世の常よ有五十音の圖とい位の甚く異なるを見たり
 べしさて字元の割出しうとハ上は擧ふ平田大人の考論さ
 れし如くあり然と今初學の童蒙の爲捷徑早く分て安
 く示は左の圖れ如し



五の顯音	五の幽音	五の兩途
父 五 五父体五 母 五 五父体五 音 五 五父体五 生 五 五父体五	父 五 五父体五 母 五 五父体五 音 五 五父体五 生 五 五父体五	母 五 五母體十父 音 五 五母體十父 生 五 五母體十父
□	○	+
マ	ア	ア
ナ	ワ	エ
カ	ハ	イ
タ	サ	オ
ラ	ヤ	ウ

然る信よ かくふくても得有よじき事ありたり其ハ上
 擧るるむく平田翁の字原を考る説よ□を○にも見ふ
 由ふれどおは一ツ□をニツ見立る業ふれば別よ○れ
 なくてはうあはぬとありされど古史徴よハ□○はやびて

象形の字あるをやと言われし也又漢籍淮南子又天道曰○
地道曰□方者主幽圓者主明明者吐氣幽者含氣云云とあれ
どおは方者主顯圓者主幽といへる誤あらむらぎて十字も
中々又奇しき神理有されども此又言ふべきはあらねば皆
洩し給

此ハ祕事シメゴトふと言ふハあらばあゝ混らハしきゆえ
洩し給

伊吹舎大人も十やうて  如此にて中々又幽フカき所由有趣
易曆等此諸書考發明ヘキラムする如くあり又洋漢竺諸萬國共
是を尊ソツトび用ひざる國を無きよし承て洋人の文字原も 

とてり割出せるよつき  の萬國大元あると著明アキラカあり然バ
天劫神の彼國くへも賦配クバツ給ひしあらむ借中の×ハ國躰
とつろ十を斜ナゝ為を故ナ其横文字も皆斜あり其を△BC
DEFGHIJの如く雨のおぐせとるようあり然どおは
以太利イタリヤ体の大字にて斜ナらきしあり是を其儘引興イとる
ハABOND EFGHIJ云云とあるおは羅馬ローマ体の大字也
さて又鶴峯戊申の嘉永刑定文字考成形圖說穴市四十七
字を信マコトとして考得たる字原あり其を見るに  如此是よ
り七七七等の四十七字を割出せるありこの主此外も鏗
本文字考又別尔刑定神代文字考等著されし如く切キし骨

折らざる志は愛しく艶しき業ふれど其説又土箇より出
せし天名地鎮と言字ふて大穴持神の大穴持ハ大下麻知の穴
ろよかく附會の説多し土箇の字ハ平田翁の然せど其未り
疑字篇よ見へとり
⊗を論ひ⊗をも蘭學家高野瑞華尔も語しに瑞華云奇
異ふる哉吾嘗て蘭字の割出せるを長崎よても質しとりし
小相違無きとありとい牙り然バ夫そ大皇國の字元より出
るると上の條こようるさくも云へる如し又文字の有無ふ
どハ論ふよ足らば諸大人等の考著まし功よより晴て白日
の如く明らからに知らえとるあり然ハ在れど今世の恒よ一
文字だよ用ハむ書よさへ一枚ありとも書たる物ふきを見

て博識の人といへども彼夏の虫ハ氷を疑如くあやぶとし
故まして庸人をや我日本よ昔より文字てふ物無し皆韓
をり渡来せる物なりふどいひ又近頃ハ漸く益くは外國
國の學びれ盛よ成以て来し故國の字を以て教獨逸の英
吉利の日に月よ開き成よ付てハ我神州固有れうるを
き神字を用ひてもあらむ其は世よ國學者と稱へる人
さへは空でも讀得ざる字や故俗人等の言ふよハ神字の縦
有よむせを世よ用ひば物の用よくはハ無ふも同前あり
とい牙り

熟世間の人ハ云ふを按ふよ神字の有よを知者萬人よ

一人有や無や既し事を辨し人も辨へぬ人も皇國とさ
へ云へざる愚の如く云ひ文字ハ皆漢より来て僅しいろ
すはきへ弘法大師が涅槃經内四句の文此心を歌よ作り
し梵字を草し略し作りしかりなど尸と皇漢初學者論ら
し中ふを聞し皆文字ふき事よて負けるハ神字のよしを知
るべざれば是非もふし其ハふくくに學有て文字ふくて
國を多ありぬとふり皇國ハ言靈の幸をひ多くくる國よて
文字よとりて事をよたよへむとゆる萬國とおふじか
らざる緣故ハ長々ればいをざれども文字も遺亡の
事ありて國字の無といふハあらざる神字の有し事

れをし又神字製作のよれとあら尸し此書よ老るして
初學の為よは

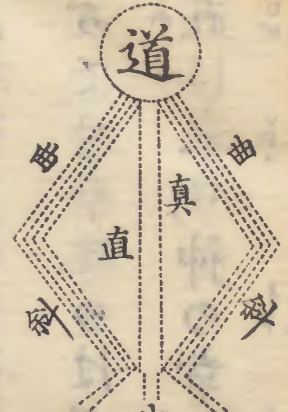
實よ千とせれば後よハ神字の隠蔽をて字論も文庫よ埋ふむ
ともやあらむうと已をぢふき身ふれど甚も慨しく悲歎し
く思ひ今外教の纏系の如ふ字を學べるもれ多き小政興ハ
麗し神字以て一枚ふり何をう書識て訣尸をしくて按ふ
よ古き祝詞又古事記等の書れ上古ふる真の神字よて書よ
し事ハ今更云尸でもふ々れど日本紀又帝王紀の跋よ
推古天皇御宇聖徳太子始以漢字附神代之文字傍又卜部家
の舊説よ欽明天皇吾國の文字を止めて韓字の通用をべ

しと常磐、大連は勅して神代より傳來の古書を韓字をもて
書代させ給ふよカミヨといふ和字は傍は神代乃二字を附
けアマテラスといふ和字の傍は天照の二字を抄けろくの
如く和字の傍は韓字を悉く付じあり又古史徵、開題記、古
二典の論下といふ奈り悉しく記せる文字ありて物記さ
を少く旨とある處を抄出し於るあり
る彦ふろは必本より其字もて譬へぞ鎮火祭詞にて言は
カミイザナギイザナミノミコトイモセフタハシラトツギ
タマヒテ云云とやう小此間の語れまゝと記よりなむおと
疑ふし然るを漢字わとりて後其字の音を假し用ひて加
牟伊佐奈伎伊佐奈美乃美古斗伊毛世布多波志良斗都伎多

麻比互とやう小固有の字小替て記るにけむ漸く小漢字
の義理をも知て神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱嫁繼給
互とやうに記せり也所思由此中神二柱嫁繼給などハを
く字、義も知得されど美古斗命字を書るハ姑く訓を借て
書る借字なりと記されしを實は然在事とおぼえたりゆ
古事記の元ハ神字かりしと上又種く言する説にていと詳
かり然ど今又更ハ神字以て寫さむとほる小此古事記を撰
べる太朝臣安萬侶の序ハ全以音連者事趣更長と有如く神
字のを以てうつしてハ字數の多くありて其文の長く
しくふれば今世の精勵學の繁き辰風ハいろいろと惑ひ思

ふふらむうされど熟考^{ヨク}るに外國^ツの書籍もいと細かに音
をつらねて長く書^キしハ勞^{イダ}加^カいしき業^{ワザ}ありととへバ御國^{ミクニ}名
ハ山城^{ヤマシ}を神字^{シメ}よて記^シセバ^ママ^イヨ^コ彼^レよて^キヤ^マシ
RO^ロ戸^ロと武藏^{ムサシ}を^トト^イ彼^レよは^キMUSASI^ムの如く二合音
三合音よてはを^フア^カを^クウ^アの如^ク類^ニよて^イ勞^{イダ}た^シ學^マよあ
る^ニ已^ダ御國^ノの^トよ貴^ク本^ノ字^ヲ以^テ書^キしを^スぞ^シ迂^ウ遠^エありと
せむ本居^{ホンキ}大人^{オホタチ}の古事^{コト}記^キ傳^{デン}の^ハじ^ニ免^メ抑^ヨこの記^キハも^モら^ラ古
語^{コト}を傳^ツふる^ヲを^ク旨^メと^シせ^ラれ^ルる^ヲ書^キふ^レバ^ハ中^{ナカ}昔^{ムカシ}ハ物^{モノ}語^ゴ文^{ブン}ふ^ド
の如^ク皇國^{ミヤクニ}語^ゴの^オし^ク小^コ一^{イツ}字^ジも^モ違^ヒ牙^ハに^ニ假^カ名^ナ書^キよ^コそ^シせ^ラら^レ
ゆ^キに^イら^フふ^シバ^ハ漢^{カン}文^{ブン}よ^キせ^ラれ^ルる^ドと^ク云^フ言^ハれ^レし

ハ信^シ然^シと^モて天竺^{テンシク}の悉曇^{シツト}ハ四十餘^{シヨ}の字^ジもて五千餘^{シヨ}卷^{クワン}を
も書^ケし^トい^フ此^{コノ}實^シ字^ジの少^シ也^{ナリ}こ^ノ也^{ナリ}宜^{ヨク}け^テ唯^タ文字^{ブンジ}の多^サふ
る^ハ漢^{カン}土^ドに^モふ^リ一^{イツ}字^ジと^モ義^ギ理^リあり^テ文^{ブン}を^モ饒^ニれ^リ然^シを
バ倭^{ヤマト}語^ゴの奴^ヌ隷^{レイ}と^シて記^シ傳^{デン}ふ^ヨも便^ニを^シ皇國^{ミヤクニ}學^{ガク}ハ洋^{ヨウ}學^{ガク}よも
漢^{カン}學^{ガク}の成^ナる^ル人^{ヒト}等^トハ^ラち^ノあ^ラぬ^モれ^ナ也^{ナリ}然^シを^バあ^ハぶ^コ
ち^ニ韓^{カン}學^{ガク}の^ヨろ^シと^シふ^ハ非^ヒ也^{ナリ}そ^ハと^シて^レ爾^ニれ^ルく^マれ^タ唯^タ我^ガ本^ホ
來^キ此^{コノ}正^{テイ}道^{ダウ}を^シ守^リて^レ靈^{レイ}の^マ真^{マコト}柱^{シラフ}太^タく^ク衝^{ツキ}立^テ異^イ端^{タン}說^{セツ}ハ^ク誑^{クワン}曲^クされ^レバ^ハ
や^ダて^レ日^{ニッ}本^{ポン}魂^{タマ}の^ハじ^メあり^テ假^カ令^{レイ}バ^ハ道^{ダウ}ハ^ハ行^{ユク}此^{コノ}圖^ズの^ニ如^ク心^{シン}
正^{テイ}直^{チキ}に^シ直^{チキ}日^{ニッ}神^{カミ}の^ニ幸^{コト}を受^ケべ^シ心^{シン}穢^{ケガレ}く^ク曲^クを^ルハ^ハ禍^ワ津^ツ日^{ニッ}神^{カミ}ハ^ハ
る^ル態^{ガイ}ハ^ハ最^{サイ}も^モ悲^{カナ}し^ク也^{ナリ}と^シふ^コ也^{ナリ}皇國^{ミヤクニ}の^ニ文^{ブン}字^ジハ^ハ正^{テイ}直^{チキ}ハ^ハ
皆^ハ外國^{ガイコク}の^ニ文^{ブン}字^ジハ^ハ皆^ハ



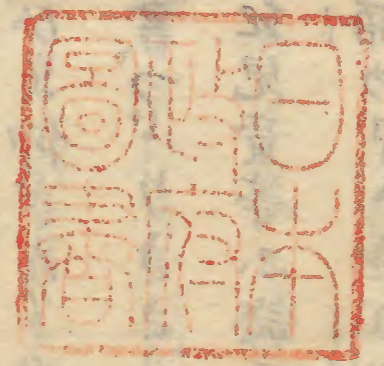
曲斜也これ等をそはハ衢
も思ひ合はべし
の道ハ多るる其中又我本
来の道ハ一筋といをむ又
種ぐさの道ハ繁きに迷へ

ども唯我う尸し道一筋ありといをむ歎そは心學者ふど
の能いふとけ登る麓の道多けせど同じ雲居の月を見る
哉尸と雨霰雪や氷と隔つせと解をそおふじ谷川の水とい
ふ俚歌とは甚く異ふれバ是を思ひ混乱とふく唯忠孝道一
筋小有り是を嚴重莫忘失○さて又古事記をも復古し神
字の真書ヲ寫さむやと按ふ心勤しむれど此ハいづせ

む已如弱くて學ひ浅く智量ふくたといやしき身ふてう
くするといはいうでと進る心も退りわづらひ蜻蛉をるよさ
れど此、ふ止ふむと心苦しく人ハ如何又笑譏るとも盛
ひ在べくも非糸バ神の幸ひを仰ぎけ、唯皇道の真心は強
ひて忠奮起して此、ふとを書づりきさをバ博識人に見せ
むとにハあらば政興が如兒童等小誨示し且ハ素讀ハ為
よは字義小心奪をれず古語の、を正訓よふさしめむと
の業よこそあを若し謬誤あらバたと識人ハ亂定給ハむ事
ヲ冀ふふむ尚精く云尸欲をれど丁數も何尸とよふり且を
不學愚昧中く小難竭々れバ概畧の記しを予が怯くも

微力もてかく努^{ツク}る情^{コト}を怜^{アヒ}て勿^ナ弄^ス給^テひそと

明治四年辛未歳五月廿五日尔記しをへん



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '日本国立図書館'.

